

# 高校生の見た最晩年の平沢貞通老 -宮城刑務所での面会に通う-

|       |                                                                                                                     |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館<br>公開日: 2019-11-29<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 細川, 次郎<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/20489">http://hdl.handle.net/10291/20489</a>                                   |

第9回企画展「帝銀事件と登戸研究所」記録  
特別プログラム講演会第1回「帝銀事件の再審請求を求め続けた平沢貞通さん」

高校生の見た最晩年の平沢貞通老<sup>(1)</sup>  
——宮城刑務所での面会に通う——

細川 次郎  
帝銀事件再審をめざす会

---

はじめに

こんにちは。細川次郎と申します。私は中学2年＝13歳の時に平沢貞通さんに初めてお手紙を差し上げました。中学を卒業した直後、宮城刑務所に初めて面会に行きまして、平沢貞通さんが亡くなるまでの約8年間、平沢さんの様子を見続けていました。そういう関係でございます。貞通さんは既に亡くなりましたけれども、平沢貞通さんを直接に知る、最も若い世代の者が私ということになります。本日の講演会のテーマは「帝銀事件の再審請求を求め続けた平沢貞通さん」ということになっておりますので、獄中39年の内、最後の8年間について、私の目から見た貞通さんの様子をお伝えできるかと思えます。本日、こうした機会をお与えいただきました、明治大学平和教育登戸研究所資料館の方々には厚く御礼を申し上げます。それでは、お手元にレジュメ（本誌92頁～）を配布させていただいておりますので、そちらをご覧くださいながら聞いていただければと思います。

1. 平沢貞通さんとの出会い

まずレジュメ1頁目（本誌92頁）をご覧ください。私が平沢貞通さんと出会ったきっかけとなりましたのは、平沢貞通さんの獄中画・資料展でした。その展覧会を主催したのが、宇都宮の洋品店主だった石井敏夫さんという方でした。石井さんは1954（昭和29）年、大学生だった時に獄中の平沢さんに手紙を送ったことをきっかけにして、33年間、文通と面会を続け、最も長く、そして、最も親しく平沢貞通さんと交流した人でした。文字通り、平沢貞通さんを

物心ともに支え続けた人です。まあ、初めは大学生でしたから、乏しいお小遣いの中からチーズなどを差し入れるという様なことをしていたようでしたけれども。お父さんの経営していた洋品店主を継いだ後、工夫に工夫を重ねて、商人としては非常に大きな成功を収めて、貞通さんに日用品やら、画材やらを差し入れ続け、本当に物心両面で貞通さんを支え続けた支援者でした。多い時には月 30 万円の画材を差し入れたそうです。そして、貞通さんが一時期、1974（昭和 49）年に東北大学付属病院に入院した時期がありました。ご本人は入院していますから、絵を描くことは出来ませんのでね、その間、画材の注文が石井さんのところに来ない。その時、石井さんは寂しかった、と言っていましたね。まあ、貞通さんが獄中で一生懸命になって絵を描き続けている。それが石井さんにとっても生き甲斐だったんだろうと思います。

私が 13 歳＝中学 2 年生であった 1979（昭和 54）年 1 月 27 日（土）と 28 日（日）に、東京神田の「あかつき画廊」で石井敏夫さんが主催した「平沢貞通獄中画・資料展」を新聞で知って、足を運びました。中学 2 年の夏から秋にかけて松本清張さんの『小説帝銀事件』、そして、『日本の黒い霧』の中に入っている「帝銀事件の謎」というものを読んで帝銀事件のことや平沢貞通さんのことを知っておりましてので、新聞を見て足を運んだ訳です。そして、この展覧会を見て、宮城刑務所の平沢貞通さんにお手紙を出した。それが貞通さんとのお付き合いの始まりでした。

1979（昭和 54）年 2 月 18 日（日）、平沢貞通さんの満 87 歳＝数え年で 88 歳のお誕生日です。その時に石井さんが横浜で開いた展覧会に足を運び、私は石井敏夫さんと初めて会場でお目にかかりました。そしてもうひと方、尾崎隆一さん。現在、平沢貞通さんを直接に知る 2 番目に若い方に当たります。この方ともこの日お会いしたということになります。そしてこの頃、平沢貞通さんはかなり高齢。まあ、満 87 歳ですから。「何とかして、畳の上で死なせてあげて欲しい。獄中で死なせないで欲しい」——そう思った石井さんは国会に、時の法務大臣＝古井喜実<sup>ふるいよし</sup>さんを訪ねました。そして、「獄死させないでください」と、一洋品店主の石井さんが一生懸命になって古井法務大臣に訴えました。古井さんは高い政治理念を持って有権者からの支持を集める、非常に人格的にも立派な政治家であったという風に聞いております。

そして更に石井さんは日本全国のあちこちで貞通さんの展覧会を開催しておりましたので、横浜展に続いて、1979（昭和 54）年 6 月 10 日（日）、小田原の「御用所画廊<sup>ごようしょ</sup>」という所でまた石井さんが展覧会を開いたので、足を運びました。そして、折りに触れて貞通さんにお手紙を差し上げておりましたけれども、同年 9 月 25 日（火）、初めて獄中の平沢貞通さんからお返事が届きました。富士山の絵を直筆で描いたお葉書です。その葉書の後ろの方で『『貞通に人殺や窃盗をすることの出来るような歪<sup>ママ</sup>つた教育はしておりませぬことを命をもって証明いたします』と命をもって証明して下さった父の墓詣の出来る日の一日も早く来てくれるよう誓願しております』と、無実を訴える文言を書いております。こうした直筆の絵葉書をこの頃だい

たい月に一度、貞通さんは私に送ってくれました。

そして私が中学校を卒業した直後ですね、高校入学式よりも前。1980（昭和 55）年 3 月 31 日（月）、宮城刑務所で初めて平沢貞通さんに面会をいたしました。満 88 歳の平沢貞通老と満 15 歳の私です。高校で着るはずの詰襟学生服を着て面会に行きました。貞通さんは、歯は前歯が一本もなく、体も縮んで、本当にこんなおじいさんになっちゃったのかと、ちょっとびっくりするような、そんな印象を受けました。この後、足繁く刑務所に通って平沢貞通さんと面会を続けていくことになります。第 2 回目の面会は同じ年の 7 月 14 日（月）ですね。この時一緒だったのは先程お話した洋品店主の石井敏夫さん。そして大津健一さんという方なのですが、1954（昭和 29）年にカービン銃ギャング事件という事件を起こした主犯です。一審で死刑、二審で無期懲役、そして、この時、仮釈放で社会に出て来ている状態。そして、大津さんの前科のことを知りながらあえて大津さんを雇ってくれた社長のもとで、大津さんは発奮して働いていました。平沢貞通さんとは 1954（昭和 29）年から 1962（昭和 37）年の 8 年間、隣の房で過ごしていた。まあ、東京拘置所にいた平沢さんのことを非常によく知っている人物でした。ただし、この日、大津さんは平沢さんとの面会は許されませんでした。また、後ほど所々大津さんの話が出てきますけれども、獄中での貞通さんの様子、それをこの大津さんが私にも話してくれました。

仙台拘置支所の門の左側に小さい戸がありまして、ここから面会するために中に入る訳です。受付で手続きをして面会待合室で待っていると「細川さん、三号面会室にどうぞ」というアナウンスが入る。面会待合室からこの小さな戸を通して中に入って、先に行くと面会の建物がございました。いつも三号面会室で貞通さんと面会をしておりました。

## 2. 帝銀事件と平沢貞通さん

私が高校 1 年生、事件から 32 年目の 1980（昭和 55）年 7 月 24 日（木）に事件の現場を訪れました。帝国銀行椎名町支店があった建物は不動産屋さんになっておりました。そして向かい側が長崎神社です。毒を飲んだ方が外へ飛び出して、この辺りが大騒ぎになったと聞いております。

そしてレジュメ 2 頁目（本誌 93 頁）。1980（昭和 55）年 7 月 25 日（金）、私は竹内理一<sup>りいち</sup>さん・正子さんご夫妻のご自宅に伺いました。旦那さんの竹内理一さんは帝銀事件当時の読売新聞の記者です。そして竹内（旧姓・村田）正子さんは帝銀事件の生存者の一人です。映画の「帝銀事件 死刑囚」にはお二人のラブ・ロマンスが描かれているんですけど、本当に仲の良いご夫婦でした。高校生の私が訪ねて行った時に、非常に丁寧に三時間にわたって帝銀事件のお話

を聞かせてくださいました。ご夫婦ともども人柄がよく、誠実なご夫婦でした。そして、竹内正子さんは帝銀事件の生存者ですけれども、終始一貫して「平沢は犯人ではない」と証言し続けた人です。レジュメにもこの後、折りに触れて竹内さんが「違う」と言っているコメントを載せております。私の前でもはっきりと「違う」とおっしゃっていました。まず、あの時の犯人よりも平沢の方が年を取っている。あの時の犯人はもっと若かった。犯人は44, 5歳から50歳位の間じゃないかな、と私にお話くださいました。平沢貞通さんは事件当時57歳です。ですから、年齢的にかなり開きがあるということは言えると思います。でも平沢貞通さんという方は顔が非常に整っている方でしたので若く見えることはあると思います。大津健一さんも「平沢さんは若く見えたよ」と言っています。必ずしも年齢が違うから即「違う」とは言えないかもしれませんが、犯人を見、平沢貞通さんを見たこの竹内正子さんが「年齢が違う。平沢の方が年を取っている。」そういう風におっしゃっている。年齢という相違点を上げているのは、やはり大きいという風に思います。それから犯人は帝国銀行椎名町支店で自ら「薬をこうやって飲みなさい」と言って飲んで見せているんです。ですから帝銀の人たちは皆犯人の口元に注目していた。竹内正子さんも口元が一番印象に残っている。鼻から下の辺りですね。そして「平沢を見た時に、一番印象に残っていた口元が違うと思った」と、はっきりと私にもおっしゃいました。「平沢は<sup>ほお(ほほ)ぼね</sup>頬骨が出てるでしょう。でも、あの時の犯人は卵形の普通の丸い口元だった。だから頬骨が出ている平沢は、印象が違う」という風にはっきりとおっしゃいました。年齢が違う。頬骨の形が違う。そして初めて平沢さんを見た時に、「あ、この人が犯人だ」とは思えなかったというんですね。この度の第二十次再審請求で鑑定書を出して下さっている心理学者の先生からお伺いしたんですけれども、一度でも会ったことがある人なら、後になってもう一度見た時に「あ、この人です!」という風に分かっちゃう——そうおっしゃっていました。我々の日常経験でも、会ったことがある人に、しばらくした後で「あ、この人は会ったことある」——そういう印象を持つというのは、確かにうなずけると思うんです。ですから、もし帝銀に現れた犯人が平沢さんであるのならば、竹内さんが平沢さんを見た時に、「あ、この人です」という風に思えたんじゃないのか。ところが、「平沢を見た時に、『あ、この人が犯人だ』とは思えなかった。ピンと来るものがなかった。だから平沢は犯人じゃない」と竹内さんはお話されていました。「容疑者をたくさん見た中では、平沢が一番犯人に似ている。けれども、やっぱりそういうところがね(＝年齢や頬骨の形)、違うから、私には平沢が犯人だとは思えなかった」ということでした。

そして私は、「最高裁で平沢貞通さんの死刑が確定した時はどうお思いになったんですか」と質問をしたんですね。そうしたら、レジュメ2頁目(本誌93頁)に書いてある通り、「やっぱり、私は犯人ではないと思っていましたからね。でも、あの頃だったら、本当の犯人が出て来る可能性はあったでしょう」とおっしゃいました。1948(昭和23)年に事件が発生し、最

高裁での死刑確定は7年後の1955（昭和30）年ですから。犯人が仮に事件当時に50歳位だとしても、57歳。生存していた可能性は充分あったと思います。だから「新聞記者をしていた竹内理一さんが調べている軍関係からでも、本当の犯人が出て来るんじゃないかなと思ったんですよ。」と私にお話されました。つまり、竹内正子さんから言わせると、あくまで帝銀の犯人は他にいるということですよね。そして、私が竹内理一さん・正子さんご夫妻をお訪ねした1980（昭和55）年ごろは、平沢貞通さんが恩赦になるのではないかと期待されていました。法務省の恩赦課長が竹内さんのお宅を訪ねて、被害者感情の調査をされたという話もしてくださいました。その時に竹内正子さんがお答えになったという内容が、レジュメ2頁目（本誌93頁）に書いてあります。「私は今でも犯人ではなかったと思っていますから。平沢も高齢でしょうから、恩赦は結構なことだと思います」——こうお答えになったと、高校生の私に話をしてくださいました。さらに第18次再審請求に竹内正子さんがTBSの記者に宛てた手紙も提出されていました。「あの時の犯人は平沢よりも大分若く、医者らしい落ち着いた、そうした雰囲気を持った人でした。平沢には、そういうところはないように思います」ということです。帝銀事件の目撃者の多くの方は、犯人はお医者さん、そういう様な印象を持っていた。けれども平沢貞通さんにはそういうところはありません。そういう風に竹内さんも指摘なさっています。そして、「犯人は本当にお医者さんだったんじゃないかしら」とも、竹内正子さんは私の前でおっしゃっていました。

レジュメ2頁目をご覧ください。高校1年の1980（昭和55）年の夏休みの8月25日（月）に、3回目の面会。それから、9月23日（火）に、帝銀事件当時に警視庁の鑑識課長だった野老<sup>ところ</sup>山幸風<sup>やまさちかぜ</sup>さんを、入院先の病院にお訪ねしてお話を伺ったりしました。さらに、10月1日（水）に、4回目の面会に行きました。仙台駅前で赤い羽根の募金をやっていました。募金を入れて赤い羽根を胸につけていました。面会室に入ります。画家だ、ってということもあるのかもしれませんが。赤い羽根にぱっと気が付いて「赤い羽根はどうしたの?」。そういう風に貞通さんは開口一番に言ったのを覚えております。その後も折りに触れて面会を続けていました。

そして、高校1年の終わりの頃、1981（昭和56）年1月、平沢貞通さんを逮捕した名刺捜査班長であった居木井為五郎<sup>い き い た め ご ろ う</sup>さんのご自宅に電話をして、為五郎さん本人とお話をいたしました。帝銀事件のお話を聞かせてくれました。この頃、貞通さんの恩赦が大きな問題になっておりましたので、報道機関の人から取材の申し入れがたくさんあったらしいんですね。でもやはり、つつましい元警察官としては「担当した事件については話せない」と全部お断りしていた。ところが私が「高校生なのですがけれど、帝銀事件のお話をお聞きしたい」とお電話したら、「ある程度なら……」ということで、かなり長くお話を聞かせてくださいました。陸軍登戸研究所の伴繁雄さんが高校生の質問に対しては心を開いて色々な真実を話してくれたということが、こちらの平和教育登戸研究所資料館で展示されているようですが、居木井さんにもそんな所が

あったのかなと思います。ただ、居木井さんは平沢貞通さんが犯人であると確信していました。自信満々でした。居木井さんからすれば多分そうなんだろうと、私はしみじみと実感した次第です<sup>(2)</sup>。

### 3. 平沢貞通さんとの交流

その後、1981（昭和 56）年 4 月に高校 2 年生になって以降も平沢貞通さんと面会を続けて、時には大きな、大きな絵を貞通さんから贈られることがありました。狩勝峠の風景を描いた、こんな大きい絵です。これを、もう満 89 歳になったおじいちゃんが描いて私に託してくれたんです。それを裏打ちして額に入れて。まあ、そんなことを続けていって、1981（昭和 56）年 7 月 22 日（火）、第 8 回目の面会です。私、東京に住んでいましたから、東京から東北本線で仙台に面会に行きます。石井さんは宇都宮で洋品店主をやっていたから、面会の帰りに宇都宮で途中下車していつも寄っていたんですね。それで、お寿司なんかをご馳走になる。これがもう、日常パターンということです。この日、託された大作 1 枚と色紙 2 枚、それを持って石井さんのお店に行って、その色紙を持ちながら石井さんと一緒に写真を撮ったりしていました。まあ、こんな風に貞通さんと高校生の私が交流を続けていた訳です。その後も面会を続けたりもしていきましたけれども、高校 2 年の頃、毎日の様に貞通さんに絵葉書を出していました。多い時には一日 5 通出したこともありました。ですから、この頃、本当に貞通さんと共に過ごしていた日々。まあ、そんな様な思い出があります。

### 4. 平沢貞通さん死去

レジュメ 3 頁目（本誌 94 頁）をご覧ください。1985（昭和 60）年 4 月、貞通さんは仙台の宮城刑務所から東京の八王子医療刑務所に移送されました。そして、この時から残念ながら私は文通・面会を許されなくなってしまいました。一生懸命、「石井さんが面会している後ろに立っているだけでも、話はできなくてもいいから、顔を見せるだけでも許してくれませんか」と、色々申し入れてみたんですけども、結局ダメでした。そして 1987（昭和 62）年 2 月、貞通さんは八王子医療刑務所で重態に陥ります。このままだと獄中で死んでしまう。そう思った石井さんと私は、帝銀事件の生存者 4 名、そして、亡くなった方々のご遺族にお手紙を送って、「貞通さんの釈放への同意書をください」とお願いするということをいたしました。そうしたところ、竹内正子さんはすぐに同意書に署名をして送り返してきてくれました。そして、残り 3 名

の生存者の方。T氏は銀行からある予備校に出向になっていて、その職場を訪ねて、石井さんと私でお願いしました。そして同じ日に、女性の生存者であったAさんにもご自宅を訪ねてお願いしました。ただし、裁判沙汰になっている問題に対して、自分の意思をはっきりと示す。そういったことは避けたいという気持ちが働くんでしょうかね。ちょっと及び腰、関わりたくないという様なお様子でした。そして、支店長代理であった男性のY氏。この方にお手紙を差し上げたけれどお返事がないので、石井さんと二人でご自宅を訪ねました。インターホンを押して、ご家族の方が「本人はもう高齢でそれどころではないんだよね」とお答えになった。結局、Y支店長代理ご本人とは言葉を交わすことができませんでした。そうした中で古井喜実・元法務大臣——先程、石井敏夫さんが直訴したとお話した法務大臣です。この時はもう大臣ではなくなっていましたけど——その元法務大臣にも「賛同書に署名をください」とお手紙を出してお願いしたら、私の自宅の方に直接古井さんご本人からお電話いただきまして、「立場上、署名をすることはできないが……」とおっしゃりつつも、とても丁寧な言葉遣いで激励の言葉を直々にくださるという非常にうれしい出来事もありました。

そして、1987（昭和62）年4月5日（日）、平沢貞通さんは危篤に陥ります。その日、私も急いで八王子医療刑務所に駆けつけました。それも夜だったんですね。八王子の駅から外れたところに刑務所があるので、夜なので正門前は暗いだろうと思って懐中電灯を持っていったんですね。ところがですね、正門に近づくと、正門前が明るいんですね。なんだろうと思って行ったら、ものすごい数の報道陣。煌々とライトをつけて、そんな明るさだったんですね。小宮山重四郎さんという衆議院議員（＝平沢貞通救援国会議員連盟の会長）、遠藤誠主任弁護士、平沢貞通さんの養子の平沢武彦さん、三つ松要さん（＝「救う会」の事務局長代行）……こうした方々を、ものすごい数の報道陣が取り囲んでいるなかでの記者会見が行われていました。そして石井敏夫さんも駆けつけて来ました。この日は近くのビジネスホテルに宿泊しました。遠藤弁護士が「刑務所がホテルを準備してくれました」って言ったら、どうって報道陣が笑ったのを覚えています。そして翌朝、八王子医療刑務所に遠藤弁護士、平沢武彦さん、三つ松要さん、そして石井敏夫さんの4人と私で面会に向かいました。

平沢さんが危篤に陥ったのが4月5日（日）なんですね。そして亡くなるのが5月10日（日）。つまり一ヶ月以上生き続けたんですね。平沢さんが危篤に陥った翌日の4月6日（月）に、私は面会できなかったんですけど、中に一緒に入った時に、氷見さんという医療部長が白衣を着て我々の前に出てきました。危篤になってもなお生き続けている平沢さんの生命力について「超人的である」と我々の前で語っていました。それについてのお話がレジュメ4頁目（本誌95頁）に書いてあります。東京拘置所の看守であった牟田口裕之さんの話です。このことを話すと、私はいつも涙が出て声が詰まっちゃうんです。声が詰まっちゃったらごめんなさいね。牟田口さんが東京拘置所で平沢さんと一緒にいた時のことを、平沢さんの一周忌で語ってくださった

んですね。「平沢さんが私にこう話したことがある。『自分が帝銀事件の犯人の汚名を着せられて死刑にされること自体は、交通事故で毎年一万人以上の人が命を落としていることを考えれば、まだ諦めがつく。けれども、俺の子や孫が、帝銀事件の平沢の子だ！孫だ！と言われて、世間から痛めつけられていることを思うと、俺は死んでも死にきれない。何としても再審で無罪を勝ち取らなきゃならないんだ』」。そう平沢さんが牟田口さんに話したっていうんですね。牟田口さんは言っていました。「それを聞いた時、私は涙が出そうになりました」と。まさに平沢さんは危篤に陥った時、1987（昭和62）年4月5日（日）の夜から、亡くなる5月10日（日）までの一ヶ月以上、「無実の罪を再審で晴らすまで死んでも死にきれない」——そんな思いで生きていたのではないかと、そんな風に思います。

この日、一緒に面会に行った遠藤誠弁護士は2002（平成14）年にご逝去。平沢貞通さんの養子の武彦さんは、2013（平成25）年に残念ながら孤独死しました。そして、三ツ松要さん（＝「救う会」事務局長代行）は、武彦さんとほぼ同じころにお亡くなりになったと伝え聞きました。さらに、石井敏夫さんも2年8ヶ月前の2016（平成28）年4月8日に亡くなりました。貞通さんが危篤に陥った「あの日」、取るものも取り敢えず駆けつけて、翌朝一緒に面会に向かった人たち。私のほかに四人いらっしゃいましたけれども、四人ともすでに亡くなり、私は平沢貞通さんが危篤に陥った「あの日」を語れるたった一人の生き証人になってしまいました。

あの日、石井さんが面会に行った時に、「おじちゃん、宇都宮の石井が来たよ」って石井さんが語りかけたら、貞通さんが目を開けたっていうんですね。もちろん目玉が見えるほど目を開けるほどではないでしょうけども。目を開けて上半身がこうやって動いたって。「ああ、通じたんだなあって思ったよ」と、石井さんが毎日新聞の記者の取材に答えながら話していたのを今でも覚えています。

そして1987（昭和62）年5月10日（日）朝8時45分、八王子医療刑務所で平沢さんは亡くなりました。その時、私はNHKのラジオをかけたんですね。そこで帝銀事件生存者の竹内正子さんのコメントが放送されておりました。「今では昔のことになってしまったが、銀行に現れた犯人と平沢死刑囚が別人であったということは今でも確信している。再審請求は認められませんでした。せめて生きているうちに釈放させてあげたかったです」。帝銀で毒を飲まされた生存者



第1図 平沢貞通（1987年5月10日撮影，細川次郎氏提供）

の一人である竹内正子さんが、平沢さんが亡くなったその時にも、こうしたコメントを公にしてくれました。

その日、荻窪のマンションで平沢貞通さんの遺体と対面いたしました。顔を見たときに「あ、あのおじいちゃんだ」って思いました。仙台の宮城刑務所の三号面会室で、生きている時の顔を何度も何度も見て、話をしましたから。八王子で会えなかった期間、ブランクがあった訳ですが、貞通さんの亡骸の顔を見て「あ、あのおじいちゃんだな」と、なんだかちょっと安心するような気持ちになりました。

先程、「平沢は、頬骨の形が犯人と違う」と竹内正子さんがおっしゃっていたとお話いたしました。竹内正子さんによれば、犯人の顔の形は丸い卵型だったというんですね。ところが、平沢貞通さんの遺体の顔写真をご覧になっていただければ判る通り（第1図）貞通さんの左右の頬骨は明らかに飛び出している。明らかに顔の形が違う。だから、1948（昭和23）年1月26日に帝国銀行椎名町支店に現れて、竹内正子さんによって目撃された犯人とは、明らかに別人。平沢貞通さんは自らの亡骸を以て無実を示していると言えるのではないのでしょうか<sup>(3)</sup>。

レジュメ5頁目（本誌96頁）に入ります。平沢貞通さんが亡くなった翌日である1987（昭和62）年5月11日（月）の夜、中野の宝仙寺で仮通夜が行われました。この時、私は札幌の鈴木貞<sup>さだし</sup>司弁護士と初めてお会いしました。鈴木さんは、平沢貞通さんと最も古くから交流した支援者です。そして、昭和20年代の平沢貞通さんを知る唯一の生き証人です。現在は、札幌の老人ホームに入居なさっていて、2年ほど前に会いに行き参りましたが、今は「好々爺」という感じで、ユーモアのある楽しいお爺ちゃんという感じでした。

さらに翌日である5月12日（火）昼には、同じ宝仙寺で本通夜が行われて、貞通さんのご遺体は火葬に付されました。そして、貞通さんの亡くなった日から丸二週間後、青山葬儀所で告別式がおこなわれました。遠藤誠弁護士は弔辞の中で「生きているうちに刑務所の外に出してあげられなかった我々の非力をお詫びします」と述べていました。そして、歴史学者の家永三郎さんから寄せられた次のようなコメントも読み上げられていました——「事件の生存者である竹内正子さんが終始一貫して『平沢氏は犯人ではない』と証言し続けていること。そして、捜査員の一人である成智英雄・元警視が公然と『平沢氏は犯人ではない』と主張していること。この二点だけをもってしても、この裁判に疑問ありとするには充分でありましょう」。本当にそうだなと、私もこのコメントを聞いて思いました。

そして、その年の夏休み、小樽のお墓に初めてお墓参りに行きました。平沢さんの実の妹さんのご案内で、お墓参りをしました。きれいな、かわいい、上品なおばあさんでした。平沢家というのは目鼻立ちが整っている家系のようです。このおばあちゃんなんか、可憐な少女という印象さえある、明るく素敵なおばあちゃんでした。このおばあちゃんも2002（平成14）年に亡くなりました。そして、1989（平成元）年には、2回目のお墓参りに行きました。

## 5. 平沢貞通さんの人となり

それでは最後に、平沢貞通老の「人となり」というものを少しお伝えしたいと思います。私が直接会った時はもう満88歳。前歯は一本も無く、言葉はとても聞きづらい。会話はちょっとしづらい様な状態ではありました。高齢のため、体はすごく縮んで小さくはなっていました。髭は少し生えていましたけど、ほんのちょっとでした。ちょっとみすぼらしい感じでした。髪の毛は真っ白。ただし、獄中であまり太陽に当たっていないはずなのに（肌の）色は黒かったです。独特のダミ声で、田中角栄さんとか田中真紀子さんのお声にちょっと似ている。そんなお声で話す人でした。いつも和服を着て面会室に現れました。話をしているユーモアのある、そんなおじいちゃんでした。レジュメ6頁目（本誌97頁）をご覧ください。高校生の私が面会室に入っていくと、それまで座っていた貞通さんが立ち上がって、片手をあげて「やあ、こんにちは」と、こんな風に挨拶することも多々ありました。面会室に来る時とか、房に戻る時は自分の足で歩いて行くことが当時は出来ていました。八王子に行ってから車椅子だったと伺っています。「お元気ですか？」という、「この通り元気ですよ」と言って、面会室の仕切りボードの手前の台をドンドン！と叩いてみせる。それがいつものパフォーマンスでした。色々お話をしたんですけど、ちょっと「あれあれ」と思うところもありました。コルサコフ症候群<sup>(4)</sup>の後遺症のせいでしょうかね。明らかな嘘を真顔でいうことがありました。平沢さんがシャバにいた時、小樽の自分の家の隣にお相撲さんの北の湖が住んでいたと、私が面会している時に言ったことがありました。それでギーコ、ギーコってノコギリで木を切っている音が聞こえてきたという話を私にするんです。平沢さんがシャバにいた時、まだ北の湖は生まれていないですからね。言っているそばからありえない話をご本人は真顔で話す。そういうことがありました。コルサコフ症候群の症状にそういう症状があるという風に聞いていますので、あるいはそれが残っていたのかもしれませんが。大津健一さん（＝先ほどお話したカービン銃ギャング事件の主犯です）は、8年間平沢貞通さんと同じ東京拘置所にいた時、随分だまされたりしていますよ。だから私の前で、大津さんは「あのジジイ、本当に騙すからな」って怒っていましたね。一回大津さんのところに平沢貞通さんが「真犯人が見つかったので、私ここ東京拘置所を出ることになりました」って言ってきたというんですね。大津さんは信じちゃって「本当ですか。平沢さん、よかったですね」って言ったら、一週間経っても二週間経っても出る気配が無い。まるっきり嘘だったんですね。その様なことがしょっちゅうあり、同じ東京拘置所にいた三鷹事件の竹内景助被告人とは犬猿の仲だったそうです。平沢さんが嘘ばかり言うから竹内さんが怒っちゃったんだそうです。

私の記憶に残る宮城刑務所の刑務官の方々の話です。青木さんはいつも面会を担当してくだ

さった、ちょっと怖い感じの方でした。加藤さんは面白い人でした。私が夏休みに面会に行くと「お、来たな。夏休みか。夏休みは何日ある？ 40日？ かあー、俺も学生に戻りたいよ」。そんな風に言ってくれたりしました。そして、三号面会室の後ろで、いつも平沢さんの後ろについて話を聞きながら「うん、うん」って頷いているおじいちゃんの刑務官もいました。それから、差し入れの受付にいつもおばちゃんの刑務官がいたんです。レジュメ7頁目（本誌98頁）に書きましたけれども、1981（昭和56）年8月22日（火）、土砂降りの雨の日に面会に行きました。この日、貞通さんが大作1枚と色紙2枚をくれました。その時、「せっかく平沢さんからきれいな絵を描いてもらったのに雨で濡らしちゃいけません」と言って、大きなビニール袋をそのおばちゃんの刑務官がくれました。次の面会の時に貞通さんにその話をしたら、すごくうれしそうに貞通さんが頷いておりました。刑務官の方々も随分良くしてくれました。

平沢貞通さんの折々の表情をいくつかお伝えしようと思います。両国の川開き＝隅田川の花火大会ですね。この話を私がした時にも、貞通さんは本当に絞り出すような声で「見たいなー」って言っていましたね。まあ、30年以上獄中であって決して見ることの出来ない、かつて見た両国の川開き。本当に見たかったんでしょうね。最近、足利事件で再審無罪になった菅家利和さんにお目にかかってお話を聞く機会がありました。菅家さんは寅さん映画やカラオケが大好きということでした。それを聞いて羨ましかったです。貞通さんにも、もう一度自由を味あわせてあげたかったなという風に思いました。あといくつか貞通さんの表情を書いてありますのでレジュメをご覧ください。

## おわりに

レジュメの9頁目の終わりと10頁目⑦（本誌100～101頁）です。最後に、私は平沢貞通さんの再審無罪の実現をぜひ見届けようと思っております。天国にいる平沢貞通さんと石井敏夫さんに無罪の判決をお土産に持って行ってあげたいと思っています。そして平沢貞通さんを直接に知る最も若い世代の者として、私自身100歳、頑張って場合によっては110歳まで生きて、平沢貞通さんのことを後世に語り伝えていきたいと思っています。本日はご清聴、誠にありがとうございました。

### 〔注〕

- (1) 平沢貞通「老」という呼び方は、事件発生から62年後に再審無罪が言い渡された冤罪事件である「加藤老事件」に倣ったものである。
- (2) その後、1985（昭和60）年以降は、居木井為五郎さんは報道機関の取材に応じて、帝銀事件について語っている。『週刊読売』1993（平成5）年7月11日号のインタビュー記事には、「現在、平沢・クロ説には、疑問を呈す

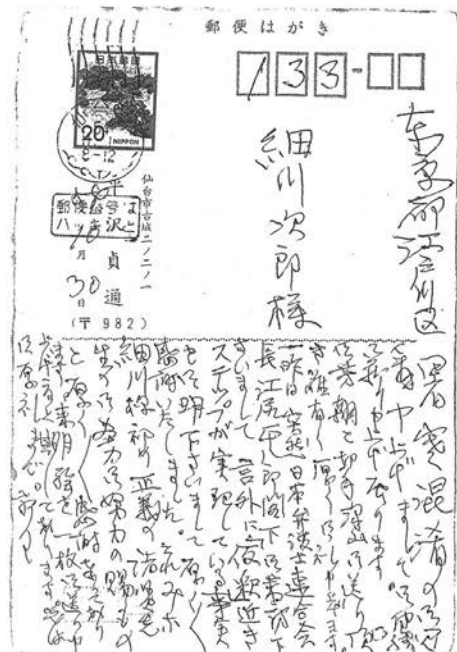
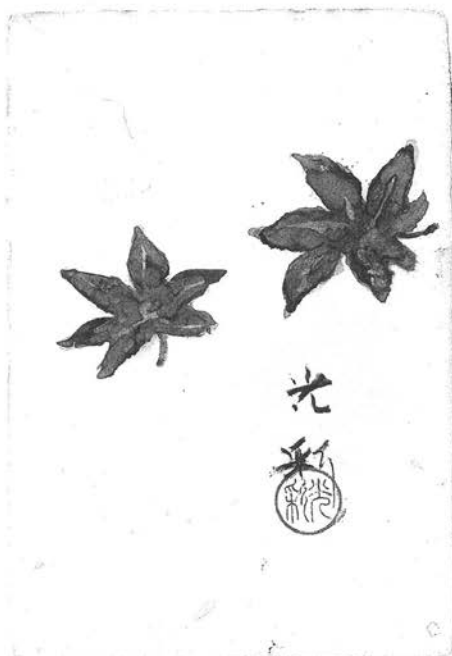
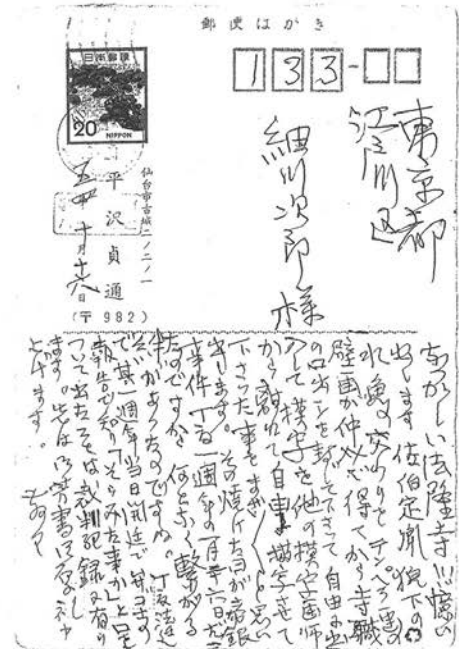
る声が少なくない。しかし、居木井さんは、立場上、当然かもしれないが、真犯人と信じきっていた」とある。『週刊読売』の記者も、私と同じ印象を持ったようだ。又、『週刊新潮』1985（昭和60）年5月23日号では、「捜査本部は七三一部隊に的を絞っていたために全然相手にしてくれない。最後には『お前は気が違ったんじゃないか』とまで面罵されましたよ」、「藤田刑事部長が、平沢逮捕の断を下してくれた」と語っている。そうした話を、居木井さんは1981（昭和56）年の段階で、高校生の私に聞かせてくれた。

- （3）竹内正子さんは、1955（昭和30）年8月発行の『文藝春秋臨時増刊』に寄せた「帝銀事件の悪夢」と題する手記で、「こちらをみつめる平沢の顔は、あの時の犯人の顔と何か根本的な違いがある、むしろ親しみすら感じられるお爺さんといった顔だったので、瞬間実はホッとしたといったところだったのです。これが私の平沢に対する第一印象です」、「違うという感じはあの時の犯人はとにかくお医者だったということなのです」、「また顔も違うんです。平沢の顔は、どうもほゝ骨が、発達し過ぎていようなんです。犯人を真正面からみているのは私とY支店長代理です。私は、どうも平沢のほゝ骨が、気にかゝるのです」と述べている。
- （4）平沢貞通氏は狂犬病予防接種からコルサコフ症候群が発症した。記憶障害、虚言などの症状がでる。

### 〔追記〕

本稿は、2018年12月1日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された第9回企画展特別プログラム講演会第1回「帝銀事件の再審請求を求め続けた平沢貞通さん」の書き起こしを加筆・修正したものです。本文中の（ ）内は筆者又は資料館による補足です。

第2図 平沢貞通から細川氏への書簡 「光彩」とは平沢の画号。1979（昭和54）年10月16日，30日付。  
（細川次郎氏所蔵）



参考資料（細川次郎氏作成・提供） ※講演会当日配布資料をもとに作成

「高校生の見た最晩年の平沢貞通老  
——宮城刑務所での面会に通う——」

細川 次郎

.....

石井敏夫氏（1934年6月5日生～2016年4月8日没。宇都宮の洋品店主）

=昭和29年～昭和62年の33年間、平沢貞通老と文通・面会しつつ、画材などを差し入れる

=平沢貞通老と最も長く、かつ、最も親しく接した支援者

=平沢貞通老を物心両面で支える

=はじめは大学生（乏しい小遣いからチーズなどを差し入れ）→その後、多い時には月30万円もの画材を差し入れ（平沢貞通老が東北大学附属病院入院中は、画材の注文が途絶えた→石井さんは寂しかったという）

.....

中学2年（13歳）

昭和54年1月27日（土）・28日（日）

東京の神田「あかつき画廊」

石井敏夫氏主催の「平沢貞通獄中画・資料展」へ足を運ぶ

平沢貞通老へ初めて手紙を送る

.....

昭和54年2月18日（日）

=平沢貞通老の満87歳＝数え年88歳（米寿）の誕生日

横浜「つうりすとギャラリー」

石井敏夫氏、そして、尾崎隆一氏（＝現在、平沢貞通老を直接に知る2番目に若い支援

者）と初めて会う

.....

中学3年（14歳）

昭和54年5月22日（火）

古井喜実（ふるいよしみ）・法務大臣に、石井敏夫氏が直訴

.....

昭和54年6月10日（日）

小田原「御用所画廊」

.....

昭和54年9月25日（火）

平沢貞通老から最初の返事＝直筆の絵ハガキ

以後、ほぼ1ヶ月に1枚、直筆の絵ハガキが届く

.....

昭和55年1月26日（土）

帝銀事件から満32年目の日

テレビで3時間ドラマ「帝銀事件」放映

.....

中学校卒業→高校1年（15歳）

昭和55年3月31日（月）

宮城刑務所にて初めての面会

満88歳の平沢貞通老と満15歳の細川次郎

.....

昭和55年7月14日（月）

2回目の面会

石井敏夫氏、そして、大津健一氏

大津健一氏

=カービン銃ギャング事件主犯

= 第1 審死刑→第2 審で無期懲役へ減刑→仮  
釈放で出所

= 昭和 29 年～昭和 37 年の 8 年間、東京拘置  
所で平沢貞通老の隣の独房で過ごす

週刊文春連載→徳間書店から単行本「さらば、  
わが友——実録大物死刑囚たち」を出版→東  
映で映画化

.....

昭和 55 年 7 月 24 日（木）

帝銀事件の現場（事件から 32 年後）を訪れ  
る

.....

昭和 55 年 7 月 25 日（金）

竹内理一氏・正子さんを、練馬区石神井のご  
自宅に訪ねる

竹内理一氏 = 帝銀事件当時の読売新聞記者

竹内（旧姓・村田）正子さん

= 帝銀事件生存者

= 終始一貫して「平沢は犯人ではない」と証  
言し続ける

年齢が違う、顔の形（頬骨）が違う

平沢を見た時に、「これが犯人だ！」とは思  
えなかった

最高裁で平沢の死刑が確定した時（昭和 30  
年）には？

→「やっぱり、私は犯人ではないと思ってい  
ましたから。あの頃だったら、本当の犯人が  
出てくる可能性はあったでしょう。だから、

こちら（＝理一氏）が調べているような軍閥  
係からでも、本当の犯人が出てくるんじゃな  
いか…とっていました」

訪問に来た平田友三・法務省恩赦課長に対し  
て

「私は今でも犯人ではなかったと思っていま  
すから。平沢も高齢でしょうから、恩赦は結  
構なことだと思います」

第 18 次再審請求に提出された竹内正子さん  
手紙

「あの時の犯人は平沢より大分若く、医者ら  
しい、落ち着いた、そうした雰囲気を持った  
人でした。平沢には、そういうところは無  
いように思います」

.....

昭和 55 年 8 月 25 日（月）

3 回目の面会

.....

昭和 55 年 9 月 23 日（火）

野老山（ところやま）幸風・元警視庁鑑識課  
長を大塚の山川病院に訪ねる

.....

昭和 55 年 10 月 1 日（水）＝都民の日

4 回目の面会

赤い羽を胸に付けていたら、平沢貞通老はす  
ぐに気が付いた

.....

昭和 56 年 1 月 6 日（火）

5 回目の面会

.....

昭和 56 年 1 月

|                              |                                         |
|------------------------------|-----------------------------------------|
| 平沢貞通老を逮捕した名刺捜査班長             | 熊井啓監督と交流会                               |
| 居木井為五郎（いきいためごろう）・元警部         | .....                                   |
| 補へ電話                         | 高校3年（17歳）                               |
| 帝銀事件についてインタビュー               | 昭和57年7月下旬                               |
| .....                        | 11回目の面会                                 |
| 昭和56年3月27日（金）                | .....                                   |
| 6回目の面会                       | 昭和58年7月下旬                               |
| .....                        | 12回目の面会                                 |
| 高校2年（16歳）                    | .....                                   |
| 昭和56年4月6日（月）                 | 昭和59年7月下旬                               |
| 7回目の面会                       | 13回目の面会                                 |
| .....                        | .....                                   |
| 昭和56年4月28日（火）                | 昭和60年4月                                 |
| 面会時に宅下げられた大作「狩勝大観」の裏打ちが出来上がる | 平沢貞通老が八王子医療刑務所へ移送される                    |
| .....                        | 私は文通・面会を許されなくなる                         |
| 昭和56年7月22日（火）強雨              | 「死刑の時効問題」で、東京地裁の藤田裁判官が、平沢貞通老を審尋         |
| 8回目の面会                       | .....                                   |
| 大作1枚と色紙2枚を宅下げられる             | 昭和62年2月                                 |
| .....                        | 平沢貞通老重態                                 |
| 昭和56年8月14日（金）                | .....                                   |
| 9回目の面会                       | 石井敏夫さんと一緒に、帝銀事件生存者と遺族に、平沢貞通老の釈放の同意書を求める |
| .....                        |                                         |
| 昭和56年8月25日（火）                |                                         |
| 10回目の面会                      | 竹内正子さん＝同意書に署名をくれる                       |
| .....                        | T氏＝職場に訪ねて会う                             |
| 昭和56年夏ごろから                   | Aさん宅で、Aさんと会う                            |
| 平沢貞通老に毎日、絵ハガキを送る＝多い時には1日5通も  | Y氏宅＝インタホン越しに家族と話す                       |
| .....                        | .....                                   |
| 昭和56年11月15日（日）               | 古井喜実・元法務大臣から細川次郎の自宅へ電話                  |
| 高田馬場のACTミニシアター               | .....                                   |
| 映画「帝銀事件・死刑囚」を上映              | 昭和62年4月5日（日）夜                           |

平沢貞通老危篤

八王子医療刑務所へ駆けつける

正門前が明るい（＝大勢の報道陣）

近くのビジネスホテル「B & B ビジネス」  
に宿泊

マスコミが去った後の遠藤誠弁護士の言葉

「マスコミは平沢が死ぬのを待っているんだ  
よ」

.....

昭和 62 年 4 月 6 日（月）

八王子医療刑務所

①遠藤誠弁護士、②養子の平沢武彦氏、③三  
つ松要・「救う会」事務局長代行、④石井敏  
夫さんの 4 人と一緒に、面会に向かう  
私は面会できず

大勢の報道陣

正門に入る場面を“やり直し”

平沢貞通老は、危篤に陥った 4 月 6 日（月）  
～亡くなる 5 月 10 日（日）まで、1 ヶ月以  
上も生き続けた

八王子医療刑務所の氷見（ひみ）・医療部長  
平沢貞通老の生命力＝「超人的」と語る

東京拘置所の看守＝牟田口裕之氏の話（＝昭  
和 63 年の平沢貞通老 1 周忌で）

「平沢さんが私にこう話したことがある。『自  
分が帝銀事件の犯人の汚名を着せられて死刑  
にされること自体は、交通事故で毎年 1 万人

以上の人が命を落としていることを考えれ  
ば、まだ諦めがつく。けれども、俺の子や孫が、  
帝銀事件の平沢の子だ！、孫だ！と言われて、  
世間から痛めつけられていることを思うと、  
俺は死んでも死に切れない。何としても再審  
で無罪を勝ち取らなきゃならないんだ』。そ  
れを聞いた時、私は涙が出そうになりました」

平沢貞通老はまさに「死んでも死に切れない」  
気持ちで生きていたのではなかったか、  
と思う

.....

①遠藤誠弁護士＝ 2002 年にご逝去

②養子の平沢武彦氏＝ 2013 年に孤独死

③三つ松要・「救う会」事務局長代行＝武彦  
氏とほぼ同じ頃に亡くなったと伝え聞く

④石井敏夫さん＝ 2016 年 4 月 8 日にご逝去

私は、平沢貞通老が危篤に陥った「あの日」  
を語る「たった 1 人の生き証人」になって  
しまいました…

.....

昭和 62 年 4 月 6 日（月）

危篤となった平沢貞通老に面会して来た石井  
敏夫氏に、毎日新聞の小泉敬太記者が取材  
石井さんの「おじちゃん、宇都宮の石井が来  
たよ！」の呼びかけに、平沢貞通老は目を開  
いた！

上半身が動いた！

.....

昭和 62 年 5 月 10 日（日）A.M.8:45

八王子医療刑務所 平沢貞通老ご逝去

NHK ラジオニュースの竹内正子さんのコメント

「今では昔のことになってしまったが、銀行に現れた犯人と平沢死刑囚とが別人であったということは、今でも確信している。再審請求は認められませんでした、せめて生きているうちに釈放させてあげたかったです」

.....

昭和 62 年 5 月 10 日（日）夜  
萩窪のマンション

平沢貞通老の遺体と対面  
「あっ、あのおじいちゃんだ…」

初めて平沢貞通老の手に触れた（＝「この手で、絵を描いていたんだな…」）  
薬のためか（?）、黄疸で顔や体は黄色かった

「末期の水」  
.....

昭和 62 年 5 月 11 日（月）夜  
仮通夜 中野の宝仙寺

札幌の鈴木貞司（すずきさだし）弁護士  
（1936 年 2 月 4 生まれ。現在満 82 歳）  
平沢貞通老と交流した最も古い支援者  
昭和 20 年代の平沢貞通老を知る唯一の生き証人  
.....

昭和 62 年 5 月 12 日（火）昼  
本通夜 中野の宝仙寺 火葬  
.....

昭和 62 年 5 月 24 日（日）  
青山葬儀所 告別式

遠藤誠弁護士の言葉  
「生きているうちに刑務所の外に出してあげられなかった我々の非力をお詫びします」

歴史学者の家永三郎さんから寄せられたコメント  
「事件の生存者の 1 人である竹内正子さんが終始一貫して『平沢氏は犯人ではない』と証言し続けていること。そして、捜査員の 1 人である成智英雄・元警視が公然と『平沢氏は犯人ではない』と主張していること——この 2 点だけをもってしても、この裁判に疑問ありとするには充分でありましょう」  
.....

昭和 62 年 6 月  
宇都宮  
石井敏夫氏主催「平沢貞通 39 年の軌跡」の  
展覧会  
.....

昭和 62 年 8 月  
小樽  
平沢貞通老の実妹と一緒に初めてのお墓参り  
→ 2002 年ご逝去  
.....

1989 年（平成元年）8 月  
小樽  
2 回目のお墓参り  
.....

|              |
|--------------|
| 平沢貞通老の“人となり” |
|--------------|

.....

①前歯は1本も無く、言葉はとても聞き取り  
づらかった

体は高齢のため縮んでいた

髭（ひげ）は僅か（＝自画像の髭は過剰）  
髪は全部白い（＝ハゲてはいなかった）

色は黒かった

ダミ声  
＝武彦さんの撮影したご長女の動画では、お  
声がそっくりだった

いつも和服（＝夏は甚平を着ていたことも  
あった）

腕にあせもが出来ていたのを見せたことも  
あった

ユーモアがあった

.....

3号面会室に入っていくと、平沢貞通老は立  
ち上がって、片手を挙げて「こんにちは」

宮城刑務所では、独房から面会室への往復は  
自分の足で歩いていた

背は真っ直ぐ伸びていた（＝腰は曲がってい  
なかった）

「お元気ですか？」と問うと、プラスチック  
板の向こうで、いつも「この通り、元気です」  
と台をドン！とたたく

.....

②コルサコフ氏症の後遺症？

明らかな嘘を真顔で言うことがあった

面会時に、「小樽の平沢貞通老の家の隣に、  
北の湖が住んでいて、ノコギリを引いている  
音が聞こえてきた」と言ったことがあった

大津健一氏の話＝「あのジジイ、本当に騙す  
からな」

「大津さん！ 真犯人が出て、私はここを出  
ることになりました」と大津氏に言ったこと  
があった

（＝真犯人がもう捕まってしまったようなこと  
を言う。大津氏は、はじめは信じてしまった）

三鷹事件の竹内景助・被告人とは犬猿の仲（＝  
平沢さんが嘘ばかり言うから）

.....

③私の記憶に残る宮城刑務所の刑務官の人た  
ち

青木氏＝小太りで小柄。目付きがちょっと怖  
い刑務官。いつも面会担当だった。面会用の  
建物ではじめに対応→腰の鍵で鉄扉を開け  
て、向こうに行くと、3号面会室に入って来  
て、平沢貞通老の隣で会話を速記

加藤氏＝四角い顔の楽しいおじさん（＝「ペ  
ヤング ソース焼きそば」のテレビCMのタ  
レントさんに似ていた）

「おっ、来たな！夏休みか？！」「夏休みは  
何日ある？ 40日！？ かあ～、俺も学生に戻

りたいよ！」

3号面会室で、平沢貞通老の後ろで椅子に座っていたおじいちゃんの刑務官  
(=私の話を聞きながら、「うん、うん…」と  
いうように、頷いていた)

差し入れの受付にいたおばちゃんの刑務官  
=昭和56年8月22日(火)、どしゃ降りの  
雨の日の面会時に、「せっかく平沢さんから  
綺麗な絵を貰ったのに、濡らしてしまっ  
てはいけません…」と言って、大きなビ  
ニール袋をくれた

→次の面会で、平沢貞通老にそのことを話  
したら、平沢老は嬉しそうに笑って、頷  
いていた

冬の面会時には、面会室にストーブが置  
かれていた

そして、面会終了後に、平沢貞通老が廊  
下に出ると、上着を持った刑務官が待っ  
ていて、平沢老の肩に上着を掛けた

刑務官が上着を持って待っていてくれた  
のに気付いた平沢貞通老は感動したよう  
に、大きな声で「お～っ！！」と言っ  
ていた

大津健一氏の話＝「でも、平沢さんの態  
度は卑屈だよ。だから、刑務所のお役人  
は平沢さんには親切なんだ」

.....

#### ④平沢貞通老の折々の表情

両国の川開き＝隅田川の花火大会のこ  
とを話

した時、「見たいなあ…」と、絞り出す  
ような声で言った

(芸者さんにモテた話もしていた)

最近、菅家利和さん(足利事件で無期懲  
役確定→再審で無罪)にお会いして、お  
話を聞く機会があった

=菅家さんは、寅さん映画のDVDやカ  
ラオケがお好きとのこと

→羨ましかった＝平沢貞通老にも、も  
う一度自由を味わわせてあげたかつ  
た

.....

「北海道平沢貞通氏を救う会」の人が、  
国際的人権機関「アムネスティ」に、平  
沢貞通老の問題を訴えたことを話した  
時

「国際的に、だいぶ問題になったよう  
ですよ」と語った平沢貞通老の表情

=菅家利和さんや斉藤幸夫さん(松山事  
件で死刑確定→再審で無罪)が、釈放直  
後の記者会見で見せた「怒りの表情」に  
そっくりだった

.....

映画「さらば、わが友」＝東京拘置所  
で、冬に大津健一氏と平沢貞通老がお  
風呂に入るために、禪(ふんどし)姿で  
「寒い！寒い！」と言いながら、風呂場  
まで廊下を走るシーンがあることを話  
した時

→「う～ん、懐かしい」という表情

.....

再審の話をした時に、私が口を滑らせて  
「再審は難しいと言われています」と言  
ってしまった時

→平沢貞通老は下を向いてしまった

.....

高校2年の終わりの3月に修学旅行で見た琵琶湖の広さを、「青い水に白い波…！ 湖なのに、本当に海みたいですね！」と話した時  
→「本当に海みたいですよ」と平沢貞通老

後ろに付いているおじいちゃんの刑務官も、高校生の私がいい話題を一生懸命に平沢貞通老に話しているのを、「うん、うん…」というように頷きながら聞いていた

面会終了後に、帰りながら廊下で、刑務官に「あの人は本当に良くやってくれる…」と平沢老が言う声が聞こえた

.....

「テンペラ画にかけては、平沢さんは『日本で指折りの絵描きさんだ』って、評判ですよ」  
と言ったら、本当に嬉しそうな表情だった  
.....

石井敏夫さんをネタに、平沢貞通老を大笑いさせたことがある

石井敏夫さん

= 世界百数十ヶ国を旅行

= コレクションも多数（関東大震災の絵ハガキ、双六、切手等々）

「石井さんの奥さんが、『うちの旦那は、お店そっちのけで、あっちこっちにフラフラして困ります』なんて言ってたことがありましたよ」と私

→平沢貞通老は思わず「うおっほほ！！」と

いうように大笑い

.....

⑤石井敏夫さん

2016年4月6日 = 私が最後に会った日

ほぼ昏睡状態の石井さんに、「石井さん！今日は4月6日ですよ。29年前に、八王子医療刑務所へ、“平沢おじいちゃん”に面会に行きましたね」と語りかけた

→石井さんには私の言っていることが伝わっているようだった

4月8日ご逝去

.....

晩年の石井敏夫さん

宇都宮の自宅から千葉の老人ホームへ移る

石井さんとの面会に通う

平沢貞通老は石井さんとの面会の時に、「石井さん、有難う…」と言って、石井さんに手を合わせた

私が老人ホームへ石井さんに面会に行くと、石井さんは「有難うよ…！」と言って、手を合わせた

「情けは人のためならず」

石井敏夫さんは、人のために尽くした

→今度は、人から尽くしてもらおう番だ…と思った

「私は、石井さんが人（=平沢貞通老）のた

めに尽くす姿を、中学生の時からずっと見ていた。石井さんとの交流は37年間に及び、それは平沢貞通老と石井さんとの交流の33年間を越えた]

.....

平沢貞通老

= 帝銀事件で昭和23年に逮捕される

= 昭和30年に死刑確定

= 昭和62年に八王子医療刑務所で死去するまで、獄中39年間 (死刑確定後32年間)

= 死刑の執行は、なされなかった

.....

平沢貞通老が無実を訴え続けて、死刑確定後、32年間に亘って獄中で生き続けたこと。そして、一庶民である「宇都宮の洋品店のオヤジ」の石井敏夫さんが、物心両面で平沢貞通老を支え続けたことは、最大の裁判批判 [ = 詰襟の制服を来た高校生の私は、宮城刑務所へ平沢貞通老との面会に通いながら、ずっとそれを見つめていた ]

(石井さんの平沢貞通老への「最後の差し入れ」は、猿股だった)

.....

中垣國男・元法務大臣 (帝銀事件に関するテレビ番組のインタビューに答えて)

= 帝銀事件の生存者の証言が分かれていたこと (「この人だった」、「この人ではなかった」、「わからない」) が、死刑執行命令の障害となった

→ 「あれが無かったら、ボクは判をついただらうと思うね」

.....

⑥ 竹内正子さん

2000年2月

NHKが帝銀事件の番組を作成

NHKから、私が高校1年の時の録音テープを番組で使いたい旨の申し入れ

→ 私から竹内正子さんへ電話

→ 結局、録音テープは提供せず

「主人は新聞記者をしていましたから、取材する時には取材して、取材される時にはお断り！という訳にもいかなかった…」

ご主人 (= 理一さん) 亡き後は、取材に応じず

「今は、静かに暮らしておりますから…」

.....

高校1年の時にお会いした後、「生存者のAさんにもお会いしたい」と、私から竹内正子さんへ電話

「あんまりいい思い出ではないから。Aさんは聞かれるのが嫌なんでしょう」

.....

現在、満91歳のはず

数年前、ご住所を頼りに、竹内正さんのマンションの玄関まで足を運ぶ

郵便受けに「〇〇 (= おそらく娘さんの嫁ぎ先の姓)」とある横に、「竹内」との追記あり

呼び鈴は押さずに退去

.....

⑦ 最後に

私は、平沢貞通老の再審無罪の実現を見届け  
る

→天国の平沢貞通老と石井敏夫さんに、無罪  
判決をお土産に持っていきたい

「平沢貞通老を直接に知る最も若い世代の者」  
として、100 歳（→ 110 歳）まで長生きして、  
平沢貞通老のことを後世に語り継いでゆきた  
い